# まち・ひと・しごと新聞

第６号
発行
三島信用金庫
駿東郡長泉町下土狩96－3
055-973-5730
製作
県立熱海高校報道部
県立沼津東高校新聞部
県立韮山高校写真報道探究部
日本大学三島高校新聞部
協力
静岡県東部地域局

## 100年後も豊かな熱海を！

# 「現代版家守（やもり）」として　熱海を再生する

## 株式会社 machimori

株式会社machimori 代表取締役の市来（いちき） 広一郎（こういちろう）氏

今では活気のある熱海・銀座通り

株式会社machimoriは、街の再生、特に熱海の市街地を中心に再生する会社である。会社の目標や今後の熱海についての考えなど代表取締役の市来広一郎（いちきこういちろう）氏に聞いた。

熱海思い

市来氏は熱海で生まれ育ち、東京の大学へ進学、就職したが、急速に寂れていく熱海を何とかしようという思いで、28歳の時に熱海に戻る。様々な活動を経て、２０１１年に株式会社machimoriを設立した。市来氏は社名について、「江戸時代にあった職能の、家守（やもり）から取りました。」と語る。

## 第三の居場所を目指して

machimoriは、百年後も豊かな街を作ることをミッションとしており、第三の居場所（サードプレイス）としての熱海をビジョンとして掲げている。

サードプレイスとは、住む場所でも働く場所でもない、第三の居場所の事で、カフェや居酒屋などを指し、このサードプレイスがあることで、人との出会いがあって日常が楽しくなり、人として豊かに暮らせる。熱海全体がこのような場所になることをmachimoriは目標として活動していると市来氏は言う。

市来氏と熱海高校報動部員

市来氏は仕事をする上で大切にしていることについて「まず、一番大切にしているのが『BE THE CHANGE』という価値観です。」と言った上で、「何かを変えようと思ったり、問題を解決しようと思った時、他人事にすると問題解決しない。ちゃんと自分事にする。まず自分を変える。自分を変えなければ、周りも変わらないし、問題も解決しない。だから自分を変えよう。これは自分自身が大切にしてきたことです。」

また、市来氏は仕事のやりがいについて「街づくりをしていると、やったことの手ごたえをすごく感じる。例えば、熱海銀座は10年前はシャッター街だったのに、今はシャッターが一つもない。久しぶりに熱海を訪れて、熱海変わったねと言われるととても嬉しい。やったことが感謝されることが一番嬉しい。何より、熱海に来て、毎日幸せになったと言ってくれる人がいることが一番のやりがいです。」と語った。

市来氏に取材する1年生の菊入君

## BE THE CHANGE 変化を体現

一方で「新しい取り組みは周りから理解されないし、商売をやるのは難しいと本当に痛感した。」と苦労した点も語った。この十年で熱海の雰囲気はとても変化した。観光ではあるものの若い人が増え、地元の経営者の中で新しいことを始める人も増えた。例えば、旅館がモンブランの店を出している。10年前は何か始める雰囲気ではなかったが、今は何かをチャレンジするには面白い街になってきている。

これから変化していく南熱海の風景

しかし、熱海の中心地に比べ、南熱海はまだまだ空き家率が高い。このことに関して市来氏は「南熱海も宿泊のお客さんは増えているが、商店街は壊滅的な状況。」と課題を言及した上で「人によっては南熱海を移住先に選ぶ人もいる。実際に、南熱海を拠点に起業する人もでてきているし、これから変わっていくのではないか。」と語った。まもなく網代の街づくりの会社が立ち上がる。温泉街での繁栄と衰退どちらも経験した熱海にとって今までとは違ったやり方で街づくりをする市来氏の民間の取り組みは熱海にとってなくてはならない存在になるだろう。

## これからの熱海

市来氏の高校生に対する思い（以下全文）

「私が高校生に思うことは、今を ちゃんと生きてほしいということ。私の高校生の頃からの座右の銘は、“今を生きる”です。今楽しければそれでいい、のではなくて、今本当にやりたいことを本気でやればいいという意味です。やりたいことを見つけることは、一見難しいことかもしれませんが、自分の中から湧き上がってくる感情を大切にしてほしいと思います。何か感じたり、見つけたりしたら、ちょっとでも一歩を踏み出して、それを積み重ねることが将来何をやりたいのかを見つけることにつながるのではないかと思います。私は、大学生のころ、バックパッカーとして27か国に行きました。そこで出会った人や触れた異文化などの刺激は、今の仕事に十分に生きていると思っています。そういう風に旅をするでも何でもやりたいこと、今できることをやって、小さな一歩を踏み出してほしいです。仕事柄、色々な高校生に話をする機会があるのですが、話をすると、街づくりにとても興味を持ってくれます。昔熱海がさびれていたことを知らなかった高校生もいます。熱海出身ではない高校生にも話をする機会がありますが、自分の街を見直してみようと感じてくれて、それをとても嬉しく感じています。」

## 今を生きる 高校生に期待する事

## 編集後記

今回、取材させていただいた株式会社machimoriでは、寂れていた地元熱海をどうにか変えたい、活気のある街にしたいという市来氏の強い思いを感じられました。

話を伺って、我々高校生ももうすぐ社会に出る身として、熱海に限らず地元が今後どうなっていくのか考えるべきだと思いました。

今回の取材にご協力いただきありがとうございました。

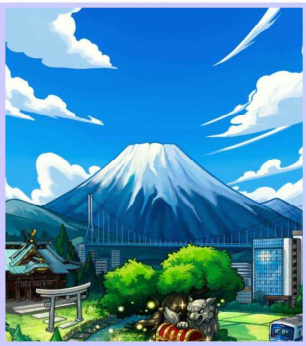
［一面担当］
熱海高校報道部

# IPアドレスで未来を変える。

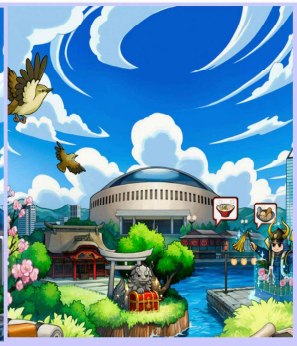
## 株式会社Geolocation Technology

## 私たちの生活を支える

日々進化を続けているITテクノロジー業界。その業界の最前線で活躍をされている、株式会社Geolocation Technologyに取材を行って、着想してから起業までの苦労や、高校生へのメッセージを伺った。



▲静岡県からアクセス



▲福岡県からアクセス

※IPアドレスを利用して、アクセスした場所を調べ、その場所によって会社のHPの画像が変わるようになっている

株式会社Geolocation Technologyは、インターネットに接続する際に使用するIPアドレスを活用したデータベース「SURFPOINT™」を構築し様々なサービスを提供している。

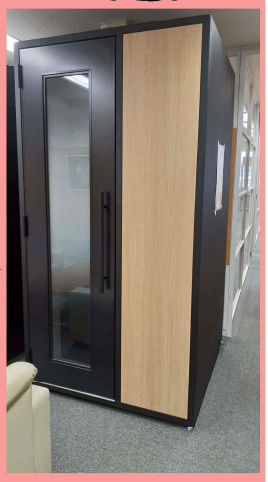
具体的には、IPアドレスに位置情報、組織属性などの情報を組み合わせたデータベースを作成し、不正アクセス防止や、利用者の地域にあった情報を表示するサービスを各社に提供している。

その代表例として、オンライン上でのスタンプラリーの「てくてくスタンプ」をリリースするなど、地方創生にも取り組んでいる。

2021年9月には福岡証券取引所に上場し、さらなる事業の拡大や地域への貢献を計画しているようだ。

## リモートワークを推進する

Geolocation Technology内では、業務の多くがリモートワークで進められている。実際、特別な理由がなければ、出社することは認められていないという。リモートワークにはどのような利点があるのか。最大のメリットは経費の大幅な削減であるという。出社する社員の人数が減ったことで、オフィスの広さが縮小され、施設管理費の削減につながったという。オフィスには、出社時に電話や他の会議の声が気にならない、ワークブースが設置されていた。



▲ワークブース

▶丁寧に質問に答えて頂いた

## 社長の原点

社長の山本敬介さんに、なぜこの会社を立ち上げたのか尋ねた。

「子供のころからテレビゲームが好きな少年でした。沼津市立沼津高等学校を卒業して、将来の進路に迷っていた時に、『コンピュータも学べるよ』と自衛隊の人に誘われた事をきっかけに、陸上自衛隊の基地通信隊に入隊しました。その後、より深く学ぶために、インターネットプロバイダの会社に就職しました」と話した。

その会社で働いていた時、静岡の官公庁から『静岡県のHPにアクセスしている人の、地域割合を教えてほしい』との要望を受け、「SURFPOINT™」というIPアドレスを利用したデータベースを作成したそうだ。

その後、当時勤めていた会社を離れて、2000年2月に現在の会社を起業した。「学生時代の趣味が起業につながっていますね」と語った。

▶山本　敬介さん

**山本敬介さんの経歴**

| | |
|---|---|
| 小学校時代 | ボーイスカウトに通う・TVゲームにはまる |
| 高校卒業後 | 「コンピュータが学べる」という理由で陸上自衛隊の基地通信隊へ入隊 |
| 1996年 | 静岡インターネット(株)へ転職 SURFPOINTのアイディアを思いつく |
| 2000年 | 退職、現在の会社の前身となるサイバーエリアリサーチ(株)を設立 |
| 2017年 | 社名を現在のものに変更。また2021年に福岡証券取引所に上場。 |

## 好きなことを自分の仕事に

自身が学生時代に経験しておいて良かった事について、山本さんに話を聞いた。山本さんは「小学生の時からテレビゲームを好んでプレイしていました。そのころからプログラミングに興味を持って、プログラミングを学び始めました。それが今のプログラミングの仕事に生かされていますね」と話した。今回のアイディアの原点は、学生時代に追求していた、ゲームの趣味が関係しているという。

このように、自分の好きなことを突き詰めると、起業のきっかけになることもあるようだ。一見関係ないように見えることも将来の仕事に影響を与えることもあり、さまざまなことを経験することが重要であると感じた。

## 編集後記

今回の取材を通じ、さまざまな不安がある中で、時代のニーズに合ったシステムを生み出し、それを実際に社会に応用していく山本敬介社長の行動力に非常に感銘を受けた。

また、リモートワークの割合を高めることでさまざまなメリットを生み出し、業務を円滑に進め、さらには業績アップにも繋げられているなど、さまざまな工夫が見てとれた。

会社の運営に見られたさまざまなアイディアや、会社の成長の軌跡から得られたことを自分たちの今後の生活に生かしていきたい。

最後に、今回の取材に関して協力して頂いた株式会社Geolocetion Technology様、本当にありがとうございました。

［担当］
沼津東高校新聞部

# 副業としての地方創生

## 三菱地所　神田主税さん

**今回、韮山高校写真報道探究部は、三菱地所に勤める傍ら、地域創生などに関わっている神田主税さんに取材を行った。コロナ禍での働き方の変化や地域活性化について話を聞いた。**

～プロフィール～
神田主税（かんだ　ちから）さん
･三菱地所エリアマネジメント企画部
･加和太建設株式会社ことづくりパートナー
NTTデータを経て、三菱地所に入社。現在は三島市在住。副業としてLtG Startup StudioやＮＰＯ法人みしまびとに携わり地域活性化を行う。

### やりたいことをやる

働き方においてコロナ禍で変化したことは、テレワークが増えたことです。今までは理由がある時にテレワークしていましたが、オンラインミーティングも一般化しテレワークの頻度が増えています。毎日は出社しなくなった人が、都心に住む必要が無くなったことで、オフィスと居住地の位置関係は密接ではなくなってきていると感じます。働き方が多様化しているので、自分のキャリアを自分で考えて選択する、パラレルキャリアの人が増えていってほしいです。大企業に就職するのも良いと思いますが、自分のやりたいことをやることも大切です。その中で地域に貢献できれば良いと思います。

### 地域との関わり

私は、住んでいる地域を盛り上げたいという思いや、自分の目の届く範囲で仕事をしたいという思いから、地域創生に関わり、都市と地域とを繋ぐような活動をしています。働き方が変化しているので、地域との関わり方もいろいろな形があります。遠い場所にいても地元愛が残っていれば、地域のことに関わることができると思います。

また、私は街に関わる人を増やす、関係人口作りを重視しています。また、地域の魅力の発信は人が軸となると考えていて、共感者を増やしていくことで、繋がりができていくと思います。高校生には、地域の活動に参加するなど、学校だけではなく、様々なことに参加して様々な人と出会い、多くの人の価値観に触れてほしいです。

## 廃幼稚園が交流の拠点に

幼稚園の面影を残す未来研究所

みしま未来研究所は神田さんも参加するＮＰＯ法人みしまびとが運営する施設だ。誰でも借りられるコワーキングスペースやレンタルスペースなどがあり、落語の講演会やマルシェなどのイベントも行い、地域の交流の拠点となっている。

この施設は旧三島市立中央幼稚園を改装したものだ。１８８９年に設立された同幼稚園は利用者の減少により２０１０年、閉校し廃墟となっていた。長年愛された場所に再び賑わいを取り戻したいと、加和太建設が同施設を三島市に提案し、２０１９年よりＮＰＯ法人みしまびとが運営を行っている。そのため、施設内には幼稚園で使われていたロッカーや黒板も活用されている。

## 世界に羽ばたく企業を支援

三嶋大社前にあるＬｔＧ

LtG Startup Studioは神田さんが創業支援サポーターを務める施設で、２０２１年11月に大社の杜みしまをリニューアルし、オープンした。LtGとはLocal to Globalの略称で、三島から世界に羽ばたく企業が生まれることを目指し創業の支援を行っている。創業を支援するアドバイザーは、投資家や銀行員、会社の社長と様々だ。また、施設内の会議室やオフィスはガラス張りとなっており、開放的で都会的な空間となっている。

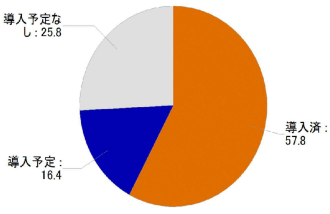
現在（１月下旬）では４人の起業家が入居しており教育ビジネスやＡＩベンチャーなどの先進的な事業を行っている。

神田さんは「今後は入居者を20～30人に増やしていくつもりです。LtGなどを活用して三島を挑戦できるまちにしていきたいと思います」と語った。

ＬｔＧの展望について取材

## コロナで変わる働き方　まとめ

### 就職後も地元に居住を




▲テレワーク導入率

今回、この紙面を制作して分かったのは新型コロナによってデジタル化やテレワークの普及によって働き方が大きく変化したことだ。今回取り上げた神田さんも新型コロナで働き方が変化した一人だ。神田さんは三島市に住みながら東京にある三菱地所に勤め、基本的にテレワークを行っている。時間に余裕ができた神田さんは積極的に地域活性化を行っている。神田さんの、LtGで起業する人を支援したり、シェアオフィスの運営に携わったりする取り組みは数々のメディアに取り上げられ、注目を集めている。

新型コロナでテレワークが普及し、ＬＩＮＥやメルカリ、ヤフーなど、居住地を問わない企業も出てきた。それにより、東京や名古屋の企業に勤めながらも東部、伊豆地域に住み続けることが可能になった。そんな時代だからこそ、就職後も地元に留まり、東部、伊豆地域を盛り上げる力となることを選択する若者が増えていってほしい。

## 編集後記

私たちは三島信用金庫さんの協力の下、三菱地所の神田主税さんに取材を行いました。テレワークの増加で居住地と働く場所との関係が薄くなっていることや、居住地に関係なく、地元に関わる方法があることについての話は、私たちにとってとても新鮮で、多くの刺激を受けました。今回取材に協力してくださった方々に、この場を借りてお礼申し上げます。未熟な点も多いですが、楽しんでいただければ幸いです。

【三面担当】
県立韮山高校
写真報道探究部

▲みしま味彩として発売中

地域のために　お客様のために

# 「おいしい・幸せ」を届ける

三島市にあるＥＬＦＩＥ　ＧＲＥＥＮ株式会社は完全屋内型水耕栽培による野菜の生産、および販売を行っている会社だ。

「もっと、『おいしい』『しあわせ』を食卓へ。」を使命とし、「地域の子どもに安全な食べ物を」という思いのもと、１０年前に創業した。

また、地域に愛される湧水を使用したり、雇用を創出したりするなど、地元愛も情熱で輝く企業だ。今回は今年から設立された三島市の工場の見学を行った。

## 地物野菜で地域創成を担う

SELFIE GREEN株式会社

### 安心・安全の地物野菜

「ＥＬＦＩＥ　ＧＲＥＥＮ株式会社」は、子どもでも食べやすいような野菜を作ることを目標に、レタスの完全室内型の水耕栽培を行っている。

使用する水にはこだわりが詰まっていて、より良い製品を届けるために、地域に親しまれている柿田川の天然水を使用している。

また、現在は販売している５袋の他、８品種ほどの栽培を検討している。

ＥＬＦＩＥ　ＧＲＥＥＮは、昨年三島市にもレタス工場が完成した。工場では、太陽光発電や、高断熱・高機密を取り入れ、衛生面にも力を入れている。

ＥＬＦＩＥ　ＧＲＥＥＮは、安心安全なレタスを地物野菜として発信している。

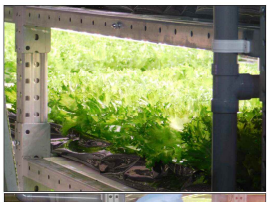
### 研究を重ねたＬＥＤ

工場では温度や湿度を一定に保って、一年中天候に左右されない状態で栽培できる。工場では、おいしいレタスにするためにＬＥＤを調光することで発育や味への影響の研究を行っている。

同社の研究によると、従来の青色の光を照射した場合、レタスは苦くなる。赤色の光を照射した場合、成長を促進する働きがあるそうだ。このような研究から同社は、照射時間や色の調整により、野菜が嫌いな子どもにも食べやすく、おいしいレタスを生産している。

また、彩りが良くなる赤色の葉のレタスを作るため、青色の光を照射するなど、日々、研究が進められている。

太陽光発電では年間２５万ｋｗｈの電力を補うことができ、環境にも良い。



▲工場内での栽培の様子

### 水や手作業へのこだわり

また、おいしいレタスを届けるため水耕栽培に必要な水にもこだわりがある。使用されているのは地元柿田川の天然の地下水だ。地元のものを使うことで、地元の人たちに親近感を持ってもらえる。また、レタスは毎回新鮮な水を使わないと育ちにくいので、地下水は毎日新しいものを汲み上げて使っている。

ＥＬＦＩＥ　ＧＲＥＥＮではレタスの収穫の作業は、手作業で行われている。パートの人たちが一つ一つ丁寧にレタスを根っこから切り離していく。

代表取締役の近藤優衣さんに手作業にこだわる理由を聞くと「手作業にすることで、レタスに傷がつかなくなる。その結果、レタスは長持ちして、時間が多少経ってしまっても新鮮な状態で食べてもらうことができる」と語った。手作業にしているのはより綺麗に野菜を届けたいという思いからだ。

▲栽培へのこだわりを語る近藤さん

### 少人数の運営体制

少人数体制で会社を運営しているところにも企業の特色が出ている。少人数のため、広報や営業などの担当分野を分けることはあまりないという。そのため、１つの問題に対して、さまざまな方向から意見を持つことができる。また、距離感が近いため、誰が何をやっているのかが分かり、連携が取りやすいという。

## やり切る力に着目

近藤さんに仕事をする上で大変なことや大切にしていることについて聞くと「日々挑戦し続けることを念頭に活動している。楽しくないと仕事は続けられないと思う。自分で新しいことに挑戦するのは大変なことだが、挑戦をすることにやりがいを感じている。他にも、できないことは人に頼ることで新たな発見もある」と自身の経験から教えてくれた。

さらには、学生時代には、頼れる仲間を見つけることも今後の人生につながるという。

次に、どんな人材を求めているかについて近藤さんは「やり切る力があることやコミュニケーションをとることができる人は必要だ。やり切る力があると、企画などをやる時には諦めずに、新たな発想を生むことができる。また、コミュニケーションを図ることができる人は仲間と協力できる。柔軟に人と接することができると、他の人に頼ることができて自分自身の進歩につながる」と教えてくれた。

最後に、今後の目標について聞くと近藤さんは「最終的には、全国や全世界の人たちに自分たちの野菜を知ってもらいたい。それをきっかけに、地元を盛り上げることにもっと貢献していきたい」と希望を語った。

潜入！

## 商品開発の現場

ＥＬＦＩＥ　ＧＲＥＥＮでは、新たな品種の栽培にも着手している。取材した際には、販売検討中の葉物類の『オービタル』と『ワインドレス』、根菜類の二十日大根を試食させて頂いた。どの野菜も赤く彩りが良いことから、レストランやホテルからの需要が高いという。

しかし、赤系に色づく野菜の工場栽培は他の野菜の栽培に比べると難易度が高く、特に野菜の見た目において大事な色彩が悪くなってしまうことがあるという。このことに深く関連するのがＬＥＤライトだ。『ワインドレス』という品種では、青いＬＥＤを照射することでその名の通り、ワインのようなきれいな赤色が出る。

近藤さんは「照射するＬＥＤの色の違いによって、成長の速度や味に影響する。さまざまな色の光を照射し、日々、お客様の要望も取り入れながら、おいしい野菜作りに励んでいる」と話した。

また今後、会社の商品を使用したオリジナルレシピを会社のホームページに掲載することを検討している。「当社の野菜をもっとおいしく手軽に楽しんでもらいたい」という思いから、現社長の近藤さん自らの手でレシピを監修したという。「レシピの制作期間中は１日３食ともにレタスを口にしていた」と話した。

レシピを制作するのに工夫した点や難しかった点について伺うと、「料理に凝りすぎると、お手頃に作れる感じがなくなってしまうため、いかに簡単においしく作れるか、紹介するレシピをたくさんの中から絞るのにも苦労した」と答えた。

レシピの公開日は未定だが、誰でもおいしく簡単に食べられるレシピだ。

ぜひ、レシピを確認して調理してみてほしい。

## 編集後記

今回取材させていただいたＥＬＦＩＥ　ＧＲＥＥＮ株式会社様は、地元のこだわりが詰まった野菜の栽培で、地元を盛り上げていっていることが分かりました。

また、工場栽培の特徴を活かした生産や、仕事をしていく上で大切にしていることなども丁寧に教えていただきました。特に、おいしいレタスにするための柿田川の地下水や手作業に対するこだわりはとても印象に残りました。

この紙面を通して多くの学生に地元企業の魅力を知ってもらえたら幸いです。取材に協力していただいた多くの方々に深くお礼申し上げます。

【４面担当】
日本大学三島高等学校
石田悠真
杉山うの
村越宥太
石井大翔
望月風花
大西駿